

先進繡像玉石雜誌

角



先進繡像玉石雜誌卷第三

岡寄五郎正宗真影并傳

正宗屋浦

新坂八國光

栗田八國綱

番飛作

鬼丸

備前二郎國宗

鐵刀

所物ふありの太刀祿

矢鏃祿

正宗祿

包丁正宗

荏柄正宗

貞宗

秋廣

國次

金重

國重

兼光

兼氏

廣光

義弘

則重

直綱

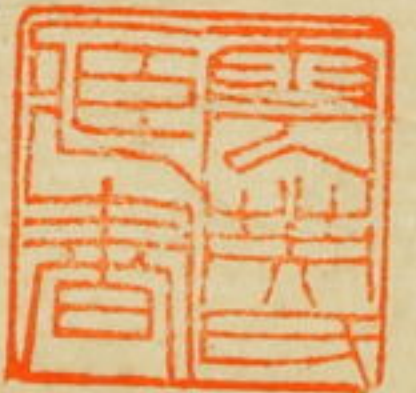
長義

丸

高雄神護寺圓乘坊寛耀真像并傳

高雄山交衆次第

柘尾山書畫乃事



稻荷神影

三位局衣原廉子真影并傳

恒良親王 八歳乃宮と云きと

白河乃園

中河門

後醍醐天皇園分寺乃行宮

成良親王 貞東乃守護 二階堂御所

義良親王 陸奥出羽乃守護 押領使

堀河御所乃帳代 腰繪乃障子

觀音寺乃城 武彦七黨 芳賀禪可

土收頼遠 青野原合我 日野僧正頼意

隱岐乃御所了御座あり日次

中門御番

大納言を重寄と云事

廉子乃贊 甘毛耗

筑紫探題北条英時妻赤橋氏影像并傳

赤橋相摸守盛時 地頭 甲山人

足利尊氏云北方 耶律述者乃妻蕭氏云と

岡崎五郎正宗真影 鎌倉大巧寺藏



信北縮圖

岡崎五郎正宗入道相模國鎌倉乃人あり父を藤三郎

行光と云正宗父永元年甲子歳鎌倉今小路に生ふ

源治正宗乃屋敷今小路の南小橋と云あり其橋の南乃

西側なり今小路と云あり今小路にあり乃稻荷と云小祠有

神ありと云傳人十七歳小橋父行光乃別名新屋又國光

乃才子と云傳人國光八歳長二年成歳生る正宗乃長むること

又長むること五十一歳なり乃老國光の才子と云ありと云傳人

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

十一年なり乃老國光の才子と云ありと云傳人國光

七次ハ國安後三郎山城守 次ハ國清後四郎 次ハ有國後
即神次 次ハ國綱分 國綱長寛元年粟田國生色 小字
 長六と云甲子の歳 十二歳 乃時豫倉へ下向し山内
 不任しく長六九入道 と称し承久三年七月十三日
 後鳥羽院隱岐國 遷幸ありし海部郡荻田郷小御座
 けふ時了則國 粟田に後右馬景國 粟田に久國子 國綱ハ
 六宗吉備前福岡九 延正 中原持也 助則 備前國仁人
 乃六人二十月宛市番を勅免しと云 後鳥羽院隱岐國
く市番をゆるぎ事乃 答松の縁より雨風をさふふり乃
仁人 増境了書しより皇年代累記よりしそ成流り乃
の頼襲の日本外史 此れ了徳と海を率り岩窟乃市番
了す 徳と海を率り岩窟乃市番の勅免の實也六人の
刑了 處よりありと云と同日の海ありし徳思さる海あり

吉也國綱ハ十九歳乃時ありかくて隱岐國有 吉也と
 十九年延應元年二月廿二日後鳥羽院崩御すし徳一
 けふ後了國綱ハ山内了 歸りけり其れ頃鎌倉ハ頼經
 將軍乃時ありし執権ハ北条義光守春時あり國綱年
 既ハ七十七歳於古稀不 踰く鐵心令腸壯年乃老不勝
 せりしと幕府乃勇士争く其他を賞義さし不と執
 権相摸守時頼吉也を 國綱了屋しと太刀を他ら
 志ハ國綱ハ十六歳乃春二尺五寸九分亂燒不濤とく
 時頼朝長了贈りしハは時頼朝長了不喜し鬼丸と
 名付く秘藏を たり或々泰時の 太刀と云北条高時の
 義貞御討死の後京都將軍家了徳たり秀吉ハ了り建長
 奉阿孫光徳へ預けらるる本阿孫代了徳を了徳以

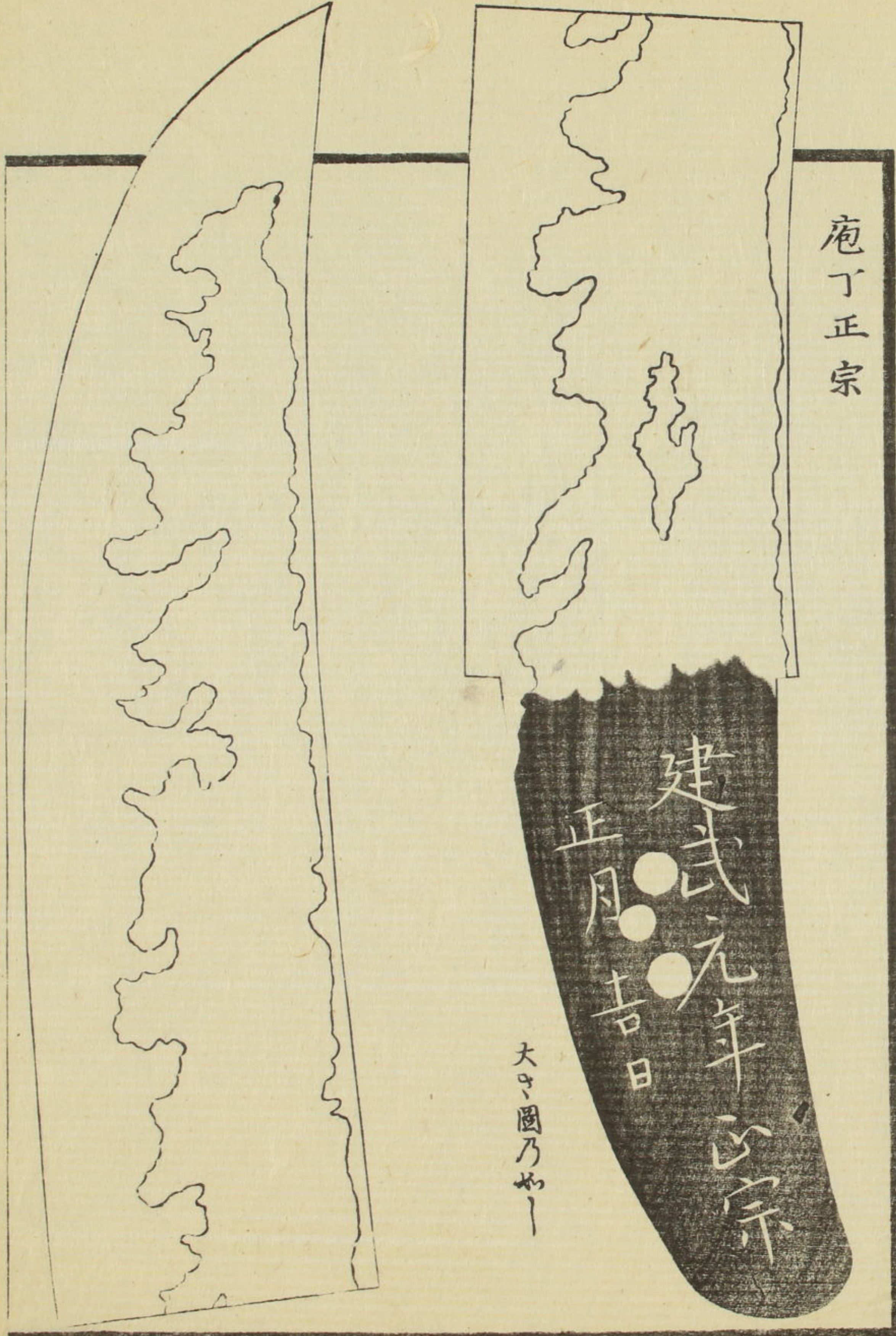
二年國綱八十八歳ありて男子を儲け國光と名付け
其伎を傳へんとて樂く生長とすあけ也とも人壽限
あはれ習ひあはれは建長七年九十三歳ありて山内あり
終焉を示しとて古今源流盡大金及び長子國光六歳の
ときあり天保壬寅五百八十八年以時山内國真國綱の
の父國光五十七歳あり

備前二郎國宗は備前國真乃子と云國真は中原持守
延正乃子あり國宗治承四年備前國福岡より生長六歳
の時正承鎌倉より下向し山内より任じ國綱より八年前
後系に六十歳の時延應父延正隱岐國より本國備前へ
歸りて同く國宗も鎌倉より備前國へゆきて父

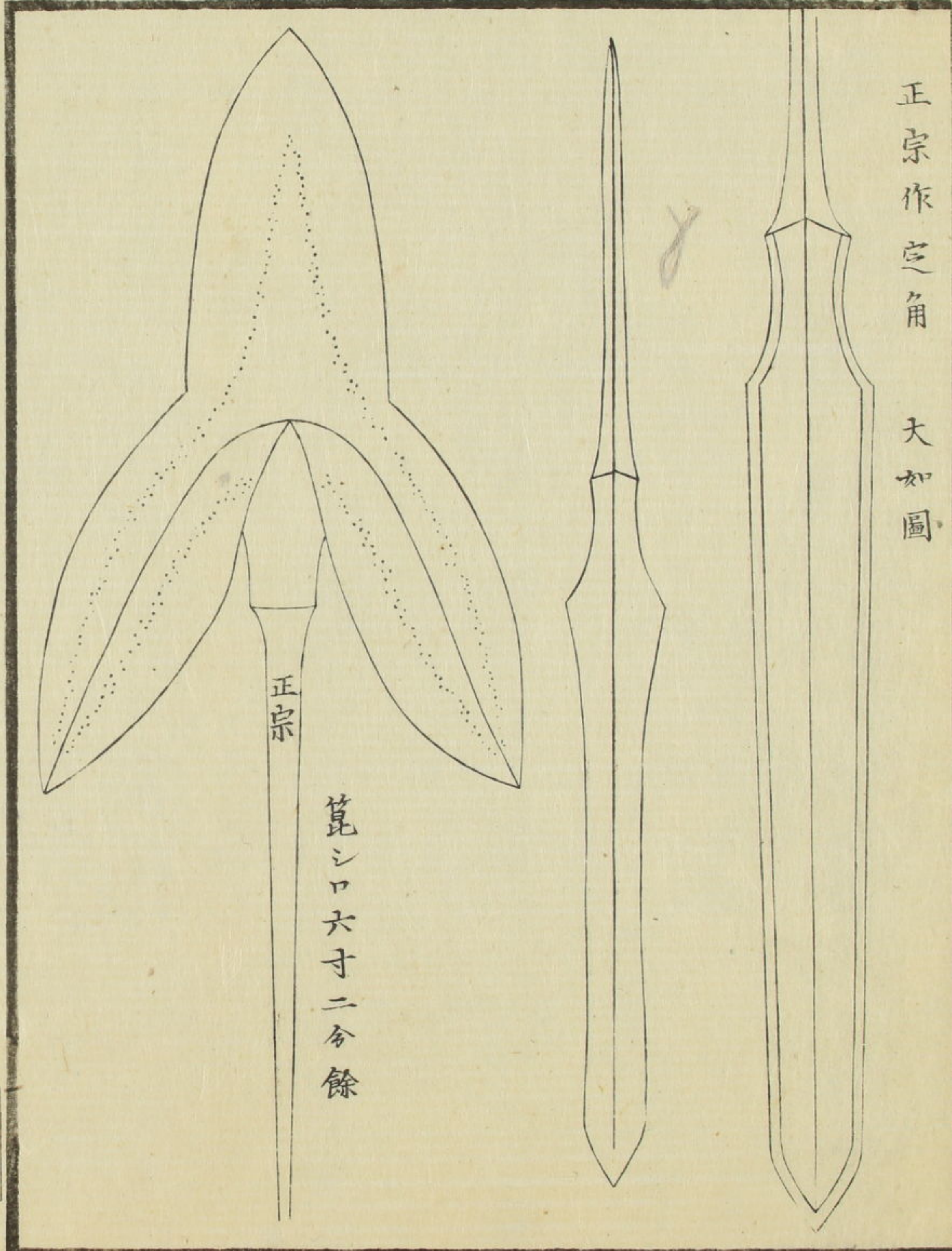
對面をりあり古鏡蓋金五十九歳備前へ歸ると記さる備前
小徑を教へて廿二年弘長元年相摸守時頼朝長乃振
應一々ありて山内あり下向し山内より任じ時八十
二歳せり乃頃國綱も一没し國光生じ十二歳あり
字を新飯入と云國光の叔父有國あり依り新飯入と
誤ある國宗その名工の子とて孤弱ありてありて弘
長二年國光十三歳乃時より弟子とて其藝を教
育せり文永十年九十歳あり國宗山内乃家あり
を天保壬寅と國光時より廿四歳國光時より七十又歳
なり五百七十年國綱國宗の弟子
なり弘安三年小國光生れり三十一歳その子

新後入左郎國重十歳新後又次郎國廣八歳新後又三郎
 國泰六歳あはれり正宗ハ十七歳あはれは國光の實子み代
 と教傳えりし理王あり正統元年國光六十三歳あはれ没を
 國重ハ七歳なり没し國廣ハ四十歳正宗ハ十九歳その伎術代り比
 類あはれりし不とよ世乃覽えりまき等倫り起過きり然るふ
 元弘三年正宗七十歳乃時子九代乃栄花忽ち亡ひし北
 条の門葉地を掃ふる如くありしは正宗鎌倉を出て京
 都より上里東山へ移りし楠正成卿乃た先づ鐵刀をゆり
 たるに建武年中乃正成りし世番孫くあはれをり新曆應
 二年七十七歳乃時また鎌倉より歸り康永二年八十一歳
 あはれ没を天保壬寅と四百比企谷妙本寺乃山に葬りし

伊勢宗又大草紙小泔物了成以左乃銘神息 天國
 真守 宗近 正恒 信房 行平 純新大夫 友成 之池
 傳七 久國 國吉 有國 吉光 後四拜 國綱 正宗
 貞宗 國俊 包平 則國 安國 國友 菊 十六葉
 國次かとい成れ死と見托ハ草紙ハ大永八年不書たは
 ありし是利義晴の時ありし正宗没しし百八十年
 正宗没しし二十三年乃内ふりし正宗貞宗の兩作新紙あり
 神息國と並に賞を
 らるしと名譽と云へり
 矢鏃銘鑑 源朝撰者志也以尾列の近板度く進茂鑑
 了上古の
 名作よりし中古近代了至るは諸國乃鍛冶乃他
 たふ鏃數百種を集録きし正宗乃鏃三本を載きり
 尤る妙出と 正宗乃太刀ハ世番くこれを賞せといへとも
 矢鏃の如きは人いす心射する處あり

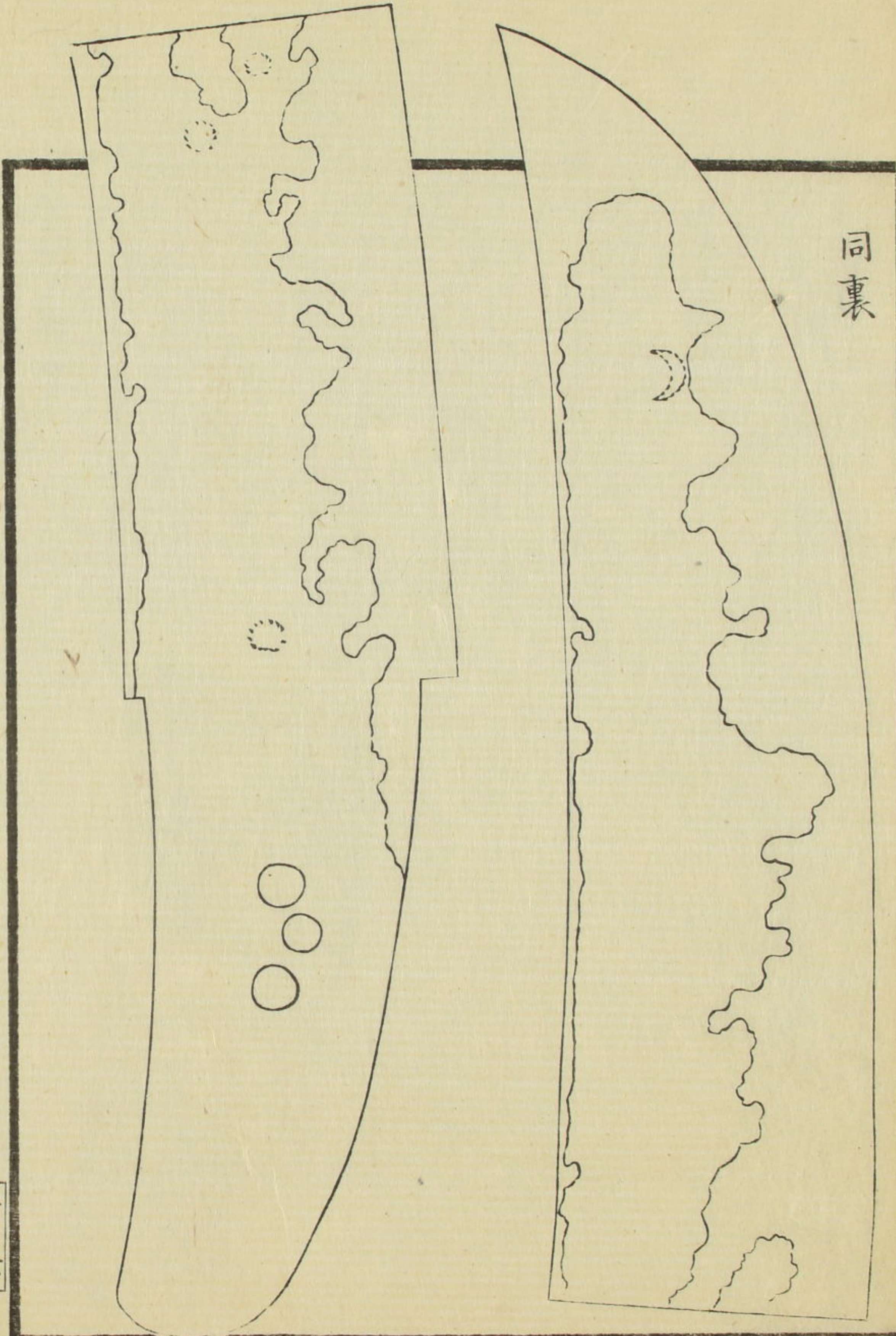


庖丁正宗



正宗作定角 大如圖

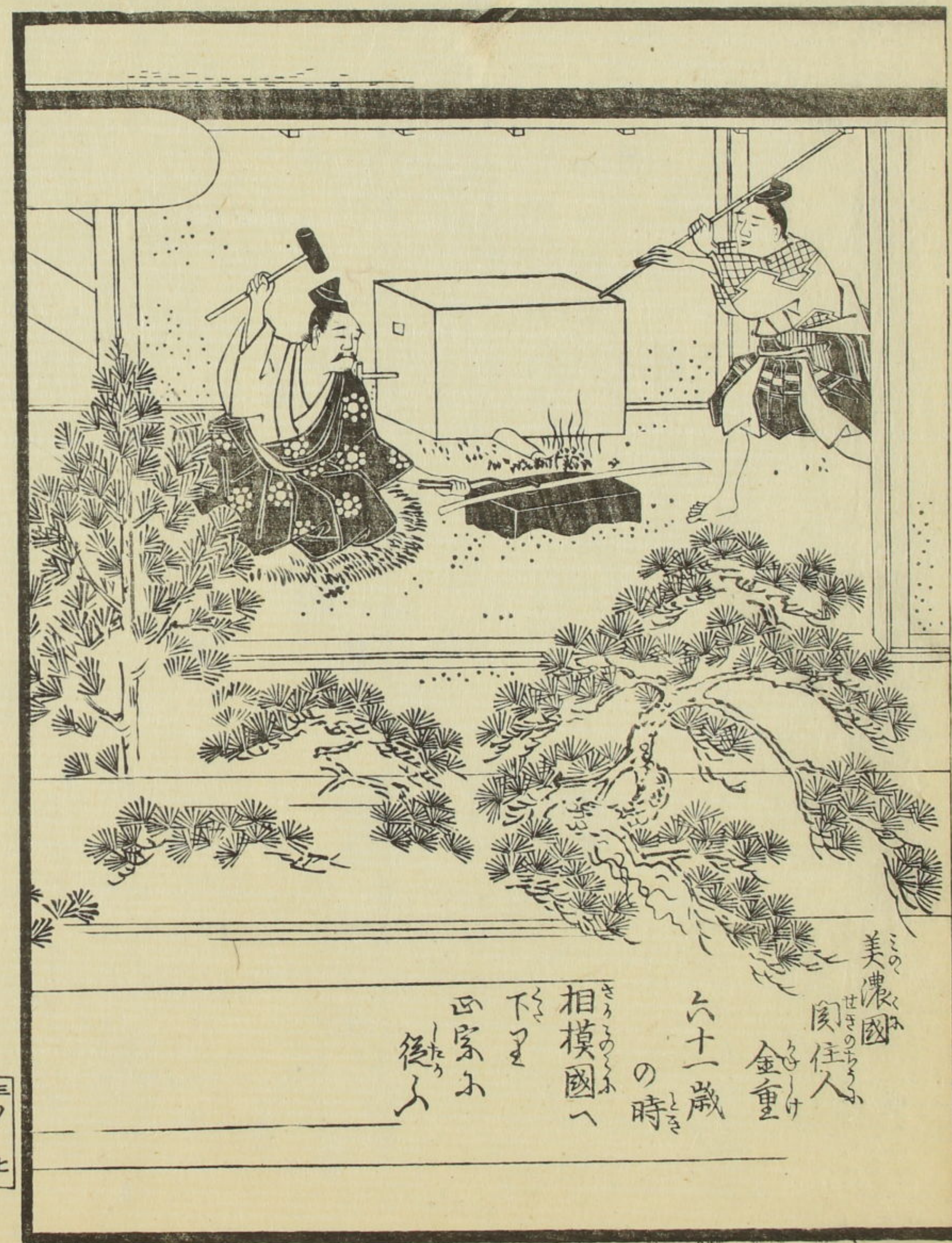
同裏



庖丁正宗ありひの北条正宗とよひまて孰とて是か歌を
 ありて建武元年の正宗七十一歳乃時なり鎌倉志不
 荏柄天神寶物乃正宗無銘長一尺三寸五分廣三寸五
 分今乃世の小刀と云割裂あり指表り梅裏ふ天蓋不動
 乃梵字俱利伽羅をり大進坊り取物なり韃靼黒塗
 あり梅乃蔭繪ありと云そのと似たりたか刀あり大進坊
 又年誕生安貞二年三十八歳みけ出家一日光ふり位一宿
 慶と云後祇治と云望風光り學人彫物乃各人あり正中元
 年百三十一歳あり波ま
 貞宗の正宗乃養子あり正安元年近江國高木と云処
 り生る彦四郎弘光と云すく根と云妙り後日根表正并助
 貞と改め元弘三年三十八歳ふり相摸國より下り正宗ふ



信光



美濃國
 関住人
 金重
 六十一歳
 の時
 相模國へ
 下り
 正家
 後人

隨たひ夢まへ正ま宗むね教のり七十歳しちじゅうさいハハ男子おとこあり助すけ貞さだ乃のり伎ぎ衆しゆ
 小こ勝かつ也やた教のりを見みて正ま宗むね養やして子こと以もつ愛あいふ於おけり貞さだ宗むねと
 改あらたむ貞てい和わ八はち年ねん謙けん倉くらあり死して幼わらわ年ねんハハ十一歳じゅういちさい 天保壬寅を距る
 百ひゃく九く十じゅう四し 貞さだ宗むね乃のり子こ秋あき廣ひろ實じつハハ九く郎らう次じ弁べん廣ひろ光こう乃のり弟あにあり
 年ねん前まへあり 正ま和わ四し年ねん謙けん倉くら生うまへと云いハハ貞さだ宗むねより里さと養やして十六歳じゅうろくさい
 あり 正ま宗むね没なす教のり時とき秋あき廣ひろ之の十じゅう歳さい應お永えい八はち年ねん八十じゅうはち四し歳さいハ
 没なす 天保壬寅を距る
 國くに次じハハ正ま宗むね乃のり弟あに子こ實じつ治ち元げん年ねん系けい不ふ生うまへ之の右みぎ邊へ尉ゑいと云い
 末すえ國くに後ご乃のり婿むこあり文ぶん永えい十じゅう一いち年ねん二に十じゅう八はち歳さいあり謙けん倉くら下げ向むかへ
 居を去さと十四じゅうし年ねん正ま應お元げん年ねん四し十じゅう二に歳さいあり正ま宗むね乃のり弟あに子こと成なる
 正ま宗むね時ときハハ乾けん元げん元げん年ねん六ろく十じゅう六じゅうろく歳さい乃のり時とき京きやう子こ正ま里さと嘉か曆れき二に年ねん八はち
 二十にじゅう五ご歳さい

十一歳じゅういちさいあり京きやう子こ没なす 天保壬寅を距る
 金かね重ちゆうハハ正ま宗むね乃のり伎ぎを慕あこむ正ま應お元げん年ねん美み濃のう國くに関せきより謙けん倉くら
 下げ向むかへ弟あに子こと成なる時とき六ろく十じゅう一いち歳さい 正宗廿九歳 乃のり
 年ねん関せきへ歸かへり應お長ちやう元げん年ねん八はち十じゅう歳さいあり謙けん倉くら下げ向むかへ 正宗
 八はち十じゅう歳さい謙けん倉くら留とどまると八年はちねん元げん應お元げん年ねん八はち十じゅう八じゅうはち歳さい乃のり時ときより
 諸しよ國こくを廻めぐり越こ後ご國くにあり元げん亨かう二に年ねん九く十じゅう一いち歳さいの春はる没なすと云い 正宗
 九く十じゅう歳さい
 國くに重ちゆうハハ文ぶん永えい七しち年ねん大だい和わ國こくより生うまへ長ちやう谷や部ぶ長ちやう兵べい衛ゑいと名な乘せ里り
 大だい和わ河か内ない京きやう都と指さし限げん所しよより任にんじり願ねがふ紙し治ち乃のり術じゆつ不ふ撻たつへ
 あり元げん應お元げん年ねん六ろく十じゅう歳さいあり初はつめ正ま宗むね乃のり伎ぎ子こ及およびさる
 としり謙けん倉くら下げ向むかへ弟あに子こと成なる時とき京きやう子こ正ま里さと嘉か曆れき二に年ねん八はち十じゅう六じゅうろく歳さい

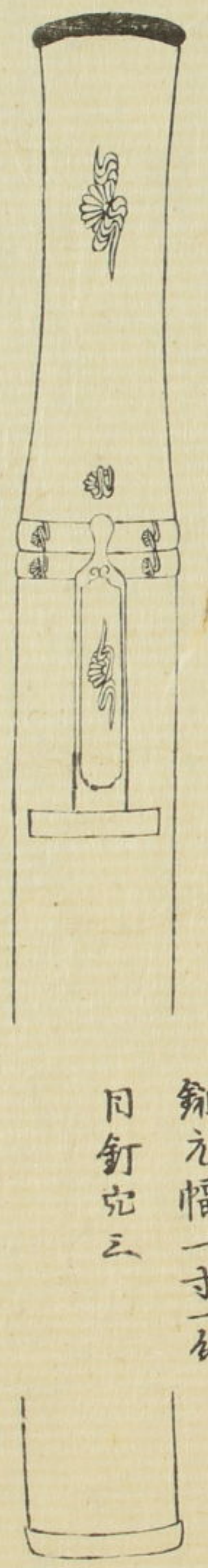
二年六月藤倉乃北条家滅亡き一後正宗藤倉を出る
諸國を遊歴し國重と相俣あつて京橋乃間へ細細
曆應元年よりすく猪隈乃齋居子任し貞和三年七十
八歳少く没す天保壬寅を距ると
四百九十六年なり
兼光ハ弘安元年備前國了生る孫左衛門尉と稱す父
を左近將監長光と云兼光元應元年四十二歳少く
藤倉子下里正宗了伎を學入因し二年備前國上田
里延文又年八十二歳少く没す天保壬寅を距ると
四百八十三年なり
兼氏ハ志津三郎と云美濃國多藝郡志津入住と始
大和子と包氏と稱す元禄元年三十六歳乃時貞濃
より藤倉了來く正宗了學入元弘三年正宗藤倉を去

とき若子せりく美濃了歸里康永三年六十一歳少く
没す天保壬寅を距ると
四百九十九年
廣光ハ藤倉の人文保元年廿八歳少く正宗乃子
と称す永仁元年次弟九郎と稱す延文四年六十七歳
少く没す天保壬寅を距ると
四百八十四年秋廣乃兄あり
義弘ハ越中國松倉乃人郷右馬允と云元應元年廿一
歳乃時來りく正宗了學入正中二年廿七歳少く没す
天保壬寅を距ると
五百十八年なり
則重ハ越中國御服入依伯乃人元應元年三十歳乃時
義弘と共に來りく正宗了學入貞治六年七十七歳少く
没す天保壬寅を距ると
四百七十七年なり

直綱ハ不見國盛綱乃子也久富つと極と延元元年
 年八十七歳みく正宗小學以貞和四年六十九歳石列
 子没を天保壬寅を距と
 長義ハ備前國長船乃人あり建武元年に十七歳の時
 正宗より遇く弟子となり應安三年八十三歳みく没を
 天保壬寅を距と
 二百七十二年
 左ハ筑前國隱岐濱乃人なり建武元年に十八歳みく
 正宗より學入左衛尉と極と文和六年八十歳みく没を
 天保壬寅を距と
 二百八十八年
 右正宗乃弟子十二人乃傳記古今然冬大令及ハ本阿
 孫光隆乃記了後人

楠龍正宗刀 大坂商家藏

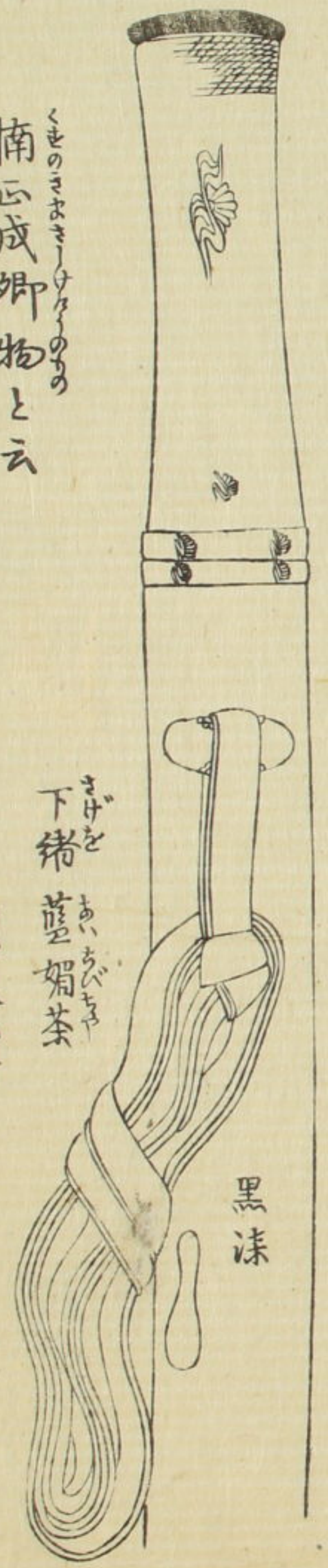
櫛口まぐ頭より四寸一分半



大如圖

身長九寸四分 莖二寸九分
 鍔九幅一寸一分
 目釘穴三

金物ニカ烏桐 菊水高乃地あり



楠正成卿物と云

下緒 莖茶 長四尺六寸

黒沫

新刀辨惑録（新刀辨惑録）に正宗伏見院御宇（伏見院御宇）之河守（河守）と受領（受領）を以て
 記す（記す）たゞこの形（形）を授けあるもや伏見院ハ正宗廿八歳乃
 時子即位廿八歳乃時（時子即位廿八歳乃時）に讓位（讓位）たりて以て受領せし
 り實（實）ならは元弘元年正月楠多門兵衛正成乃ため小化
 せざる刀不五郎入道正宗造とあるは誤（誤）なるべし入道
 正宗とあるべし
 又云或秘傳書（秘傳書）不相列（不相列）正宗ハ我打物（我打物）不（不）放（放）くハ末世（末世）不至（不至）く
 小後（小後）也（也）あるへくを云々録（録）を打（打）と云（と云）くされと直（直）
 か不（不）深（深）あることハ亂（亂）刃（刃）なりハ見終（見終）ハ故（故）小也（小也）あらんりと何（何）
 個（個）あれハ武器（武器）録（録）を云（云）ハ延喜式（延喜式）よりハ其朝家（其朝家）乃
 定めありハ秘傳（秘傳）去（去）不（不）云（云）くハあるへくハ

高雄神護寺圓乘坊寬耀真像



高雄神護寺寛耀僧都其俗姓を詳りき以曆應口年辛
己乃歳正月十九日陀羅尼講小初冬〜後々圓樂坊小
住〜高雄山寺乃交衆た〜中交衆次第了見え〜王
高雄神護寺交衆次第一卷石山産主禪守僧正乃平と〜
御室乃真光院家傳を〜信光故あり〜傳寫を教とを
履歷をある奇と云へ〜觀應二年六月法身院傳領と
も見也後々法身院了とゆ〜か教盈〜頓阿法師乃代
僧都乃坊み〜紅葉を見〜款〜ゆ〜時頓阿乃
去〜控降あ〜老ら〜乃可らの雪も夜や紡らん
と後〜教も寛耀僧都繪をあり〜侍〜せ〜
〜〜返事小
教は乃此のふ乃通〜や繪あり〜乃浪も〜

かと草菴集了見え〜教乃即曆應口年より後乃〜
傳聞山城國葛野郡梅尾高山寺開伽井坊了寛耀僧都
乃畫〜西畧曼荼羅乃拾本數種あり〜別〜當時
顯密乃諸碩德乃肖像を畫〜草本も頗ふ多〜と云
と〜彼山の庫中多くは御寺務乃宮仁和乃御封印小
あ〜虫拂の時〜御室より御代官〜何某僧正
御房登山ある〜高山寺禪堂院明惠上人不出席
去〜點檢せ〜嚴重乃式ふと〜副伽井坊乃藏
格外乃事〜方便智院慧友護圖梨乃寫〜示
寛耀僧都乃稻荷の神影あり

稻荷神影



寛雅僧都畫

三位局藤原廉子真影



二位局後原藤子右近衛中将公廉朝臣女なつか公廉朝臣
長女新大納言成親卿なり代乃孫そん小く父を左中将公仲
と云元應元年八月西園寺太政大臣實兼さきとも乃御女みま後原信
子御年十七小く後醍醐天皇乃后小立を降小出也は
主上みまいよく春乃宮小おとへおとへける時ときより御系ありく
皇女みまつ新中へ御みま権子内親王とななるは是なりさ也
ハ御即位乃初はつく立后乃宣旨を下くだり給たまひ給たまはりけし頃之位
局はつ右后の御侍子と藤女房乃やうふくはももを主上みまい
う形かたちふ玉たま簪乃ひひ求めゆゆふひんひん乃侍従しやくじゆく他た子
とふかふか所ところ覚さえりりえりり二千乃ふたご露つゆ也なり一身小ありとひとききふふから
好このりり形かたちるるここととふふくく六宮のむつ粉黛こなへへおおとともも見みるるかかけけははかかく

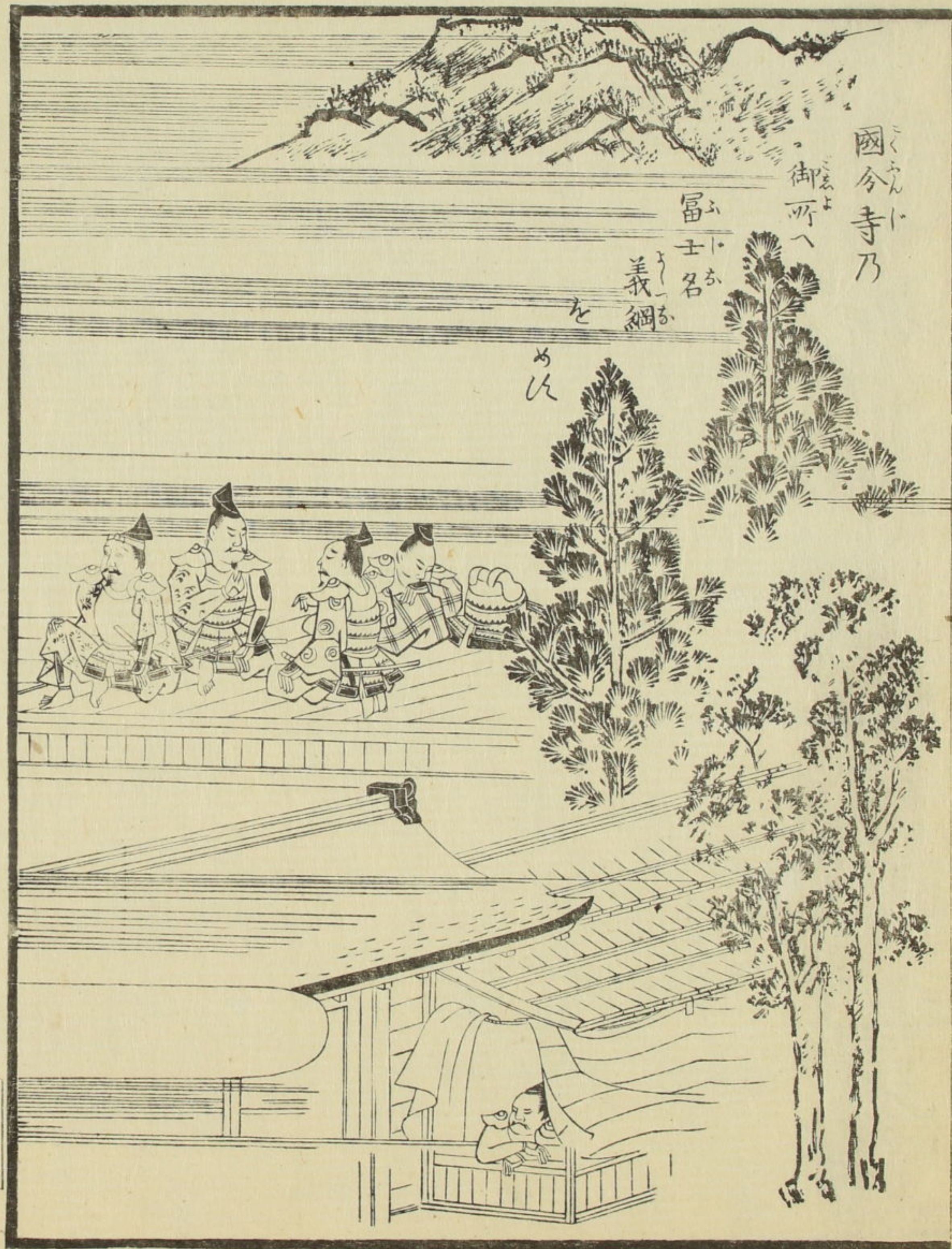
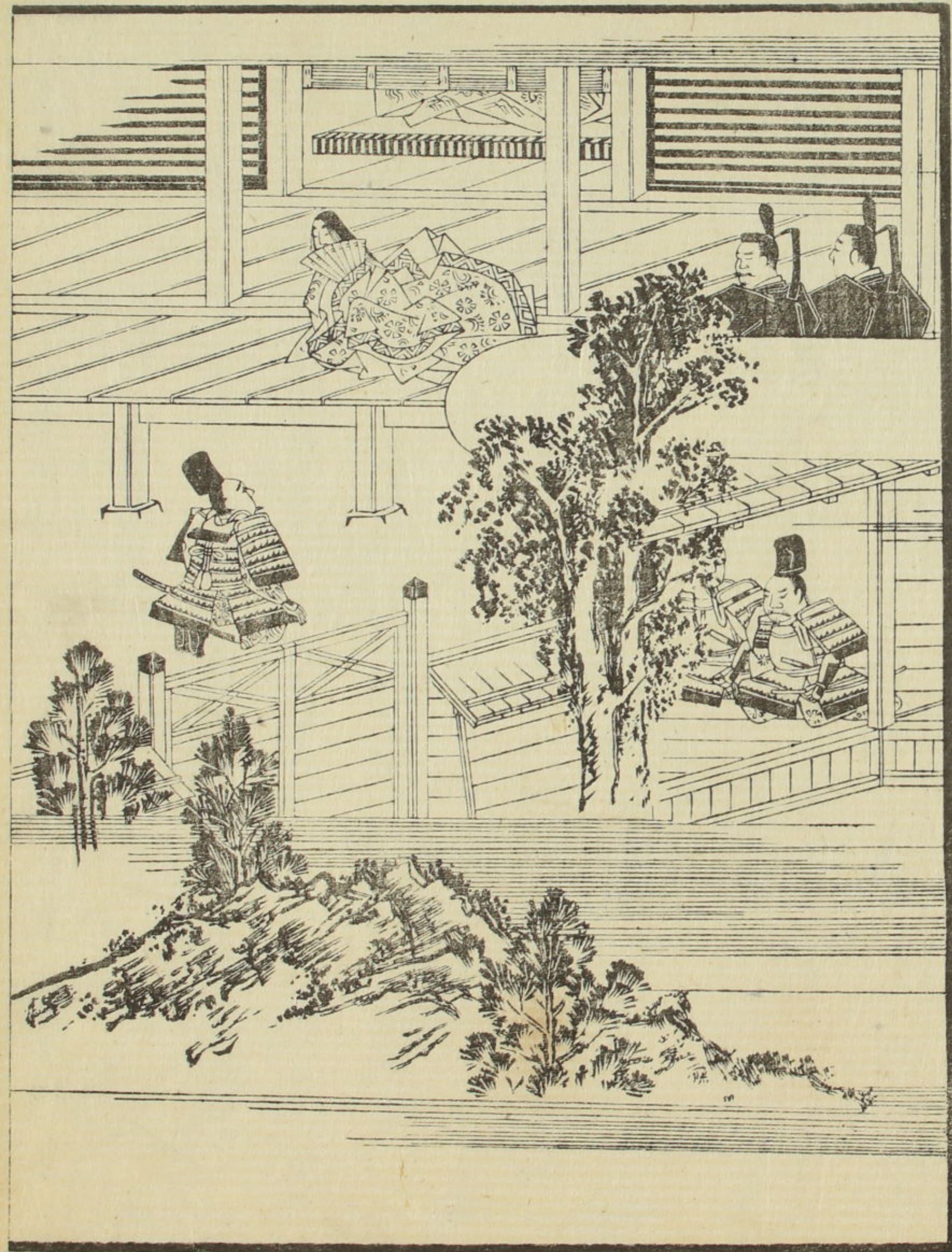
百年乃歡樂ひゃくねん乃長生殿ながせいの裏うら子こ春秋しゆんしゆをを共ともふふくく比翼ひよく乃なり多たくく
雲井うんせいの外の外乃なり妖あや々々連理れんり枝えだも雨風あめかぜ小あ歎なげくくといい知しとともも衣え
思おもひひくく増ぞう紫むら爵しやく急いそぐぐ加かへへりりんんととききハハ洞院相國どういんさうこく公こう賢けん養やう
子こ小こささりりももけけかかととかかやや中元ちゆうげん年ねん第六だいろくの皇みま子こ恒良親王こころよしなり
誕生たうじんありありししははちちののいいふふくく重おもきき御みまををくくああふふくく有ありりるるも
同どうくく二年にねん第七だいろく乃皇みま子こ成良親王なりよしなり誕生たうじんしし御みま嘉曆二年かれきにねん
第八だいはちの皇みま子こ義良親王よしよしなり亦また生なじじくく誕生たうじんありありははかかりりししりり
元徳三年げんとくにねん後三ごさん任にん小こ叙しよくく内侍ないし之の位ゐととりりててりり志しのの教けうりり
元年ごねん八月はつげつ主上みま後醍醐ごたいご天皇てんかう乃なり臨幸りんかうありありくく孫そん勒りやく乃なり鹽しほ場ば小こ
修羅しゆら乃なり衢しほとと變へんききハハ三さん位ゐ局はつ乃なり所ところ縁ゆかり了りやう付つくく北野きたの乃なり側はたけ
乃なり忍しのぶぶかかりりけけりり笠かさ置おのの戦官軍利せんくわんぐんりかかくくくく九月くげつ廿日にじふにち

城遂に落けしは主と爲櫛り赤坂城を所ん南り潜軍か
 里けふにそ色ましくたより付を移さく大和國有主ふ乃抄藤
 子六波羅乃凶徒等を所供みく十月三日尤近將監時益り
 亭へ入所ありく今まく昵近伺候の云卿教上人官をく先
 ら出仕を禁せりしり後所介錯り系仕へま致い之位向と
 頭中将忠顯朝長一条頭大支房朝長萬里小路中納言
 房卿れもありしよ元弘二年三月七日隱岐國へ遷幸か
 志なりしけるときば之位向と乃房忠顯乃兩人れも移り
 恒良親王を元弘二年八歳りおもへしけるを中納言
 中納言宣明卿中納言の御門とハ大内裏の侍賢門を云代門の
 軒の大路を中納言大路と稱し谷の櫛本
 町通ちまぬりハ通里を東納言賀茂川を渡里かを東納
 志く吉田ふ乃系ハ櫛太納言恒良親王の亭あり代を中納言
 預里ましく吉田乃中御門乃亭子
 所をありけふり主と乃所をあんふる白川を禮迎し
 と同じ宣明ハあど我を具しし所へハ系らぬそと作
 有なれも宣明卿十一歳三渡を押し皇居禮迎くおす
 中納言宣明卿ハ
 都をば飛と苦り立しりと秋分そふくまはの園
 と讀し處ふく路遠く隔たす所ふるよる人を止る園
 ありとあふまを移へとすされは宮恒良親王園食くや
 ては宣明ハ我を具しし系らしとく尤抄ハハ中納言
 能因法師の教と本教みて津守國夏り

の亭と稱し宣明卿預里ましく吉田乃中御門乃亭子
 ハ恒良親王の孫なり
 所をありけふり主と乃所をあんふる白川を禮迎し
 と同じ宣明ハあど我を具しし所へハ系らぬそと作
 有なれも宣明卿十一歳三渡を押し皇居禮迎くおす
 中納言宣明卿ハ
 都をば飛と苦り立しりと秋分そふくまはの園
 と讀し處ふく路遠く隔たす所ふるよる人を止る園
 ありとあふまを移へとすされは宮恒良親王園食くや
 ては宣明ハ我を具しし系らしとく尤抄ハハ中納言
 能因法師の教と本教みて津守國夏り

東照乃関よりゆりぬ白川も日々に経ぬ事ハ秋後そふく
又最勝寺の橋の枯たるを柱替ふとて後原雅復朝臣
あせくこころハ名跡乃春そともかとも川乃花乃下かけ
と詠たるハ洛陽渭水乃白川ふとて東山陸奥の白川関と
あふけや今ハ具とて仰せらるると宣月を恨む仰ら
せをれよりこころハ中々よ恋とて仰せらるると宣月を恨む仰ら
赤糸色あふ中門了たき後へお折る遠寺乃ハ相せり
了関えけせは
はしくとおをいりりりり相乃種を関ふも表を意し
とは種をせ移入を祖とてあふ関はき語りつと是れ
ハ歳乃宮の赤秋よとて帳幕庭ふりぬ俗俗男女ハ等
三ノ十五

けつと滅る心内より動き詞ハ外より露る赤秋乃長くこさ
類もせかふ赤事なり其後至上隠岐島を赤出ありと
船上り臨幸ありゆり諸国官軍都へ攻上る由聞えとて
但馬守護職太田守延官軍ふ加たりとて官と大將軍ふとて
千種忠顯朝臣と共子六波羅を攻落せたりとてハ
乃鍾愛こころに渥くお名ふり赤母三位白隠岐島より後ハ
系りきり忠節といひつとて等閑あり守慮をめぐり
建武元年正月廿三日皇太子不たき後へとて官も孝
約篤くおとて海を赤事いせとてとて建武中興の大業
をかき終るハ大塔宮護良親王乃英武と智累とふあり
まは義貞卿よりとて赤松圓心足利尊氏以下乃勇士も



誰よりより義兵を揚官軍に屬し太白乃旗をば靡の
まへに抑北條高時の鉄鉞乃誅を蒙りて其罪何とそ
と尋ねる一宮尊良親王をくいの宮議良親王を東宮小
立治入屋と乃敵慮を主とせしむりしと長濱重鎮を大
覺寺教所流して所信を執りて時所務あらんと
乃勅詔を返してよりしと僅り二ヶ条乃所命のすから
さりし御憤と共其承をりし東夷天威乃戮り伏し萬
聖斷り任をらば王道蕩く乃春を待得くハ一宮を春
宮よりあし系らせらるんて誰れに愧けしへしとあまハ其母
早く世を去給ふハハは御愛情のつとく篤りてへしとあま
もおくりしあぬ其あまの形を三宮乃所事ハ前坊
親王 亮

御乃後代宮子あおとととたたりし程あまのこ乃夜ハ必
まに宮小入もあしとるしとあしとるし恒良親王の東宮小立
治ハ一乃云位局乃三宮乃功高く勢たけくしとゆきを
換をせりしと一故をりしとされしと七廿長を踰
七廿り恒良親 庶嫡を奪入は天乃疾おをさすしとや
五ハ赤年十一 衆禮かく天下あまのこと東宮小門より新田一族
少下を後へらと北國ハ所下向ありしと撥乱及西乃計策を
旋らま給しとのと天運機了癒きんしと金崎乃城遂
了没落し東宮逆徒了要きらと都へ還所ありしと志のり
尊氏直義あまのこを一室より幽閉し奉りて興國元年四月直
義を奉る所藥を同食くしと所ハ地例からとと成る

かき月十二日沖年十六あく蕨御すく起直義を弑す
すまろかろへ

成良親王ハ正中二年誕生す海々元弘元年七歳不

からを流し沖御推す海々いこく之主^{後醍醐天皇}還幸^{天皇}りく後同三

年十二月廿八日東宮乃守被く謙倉^{下向}海々

足利直義を執事く々々関東を鎮撫せしを給ひける

兵亂乃後いすく一年を過る所所乃徑蒙^命を承ふる

民を煖くくく二階堂小路なる小城を他守る

亭を所所とふさ教^所を建武二年相摸次郎時^所

諫方三浦本間輩名を語らひく直義を攻んく謙倉

を襲入中を向く直義おふく無勢なりくうり七月廿

二日親王を果^すはく謙倉を落るく^海を伊^予

とく謙良親王を弑す事ハ謙良親王直義く

つくく戦入る利^也く^海色ハ^{後河内}を^継河^内

討^すくけ^り親王冬大^江時^古く^りを^所保^ふく^京都^へ

還^御す^海々^おか^し二年山門臨幸乃時ハ^鶴亭^子

侍く^若子^也明乃旭日^ハ春秋乃富^教を^迎へ^大其^皇乃

文殊^ノ智慧^ノ増進^ヲ祈^らる^海々^いける^海々^の年の

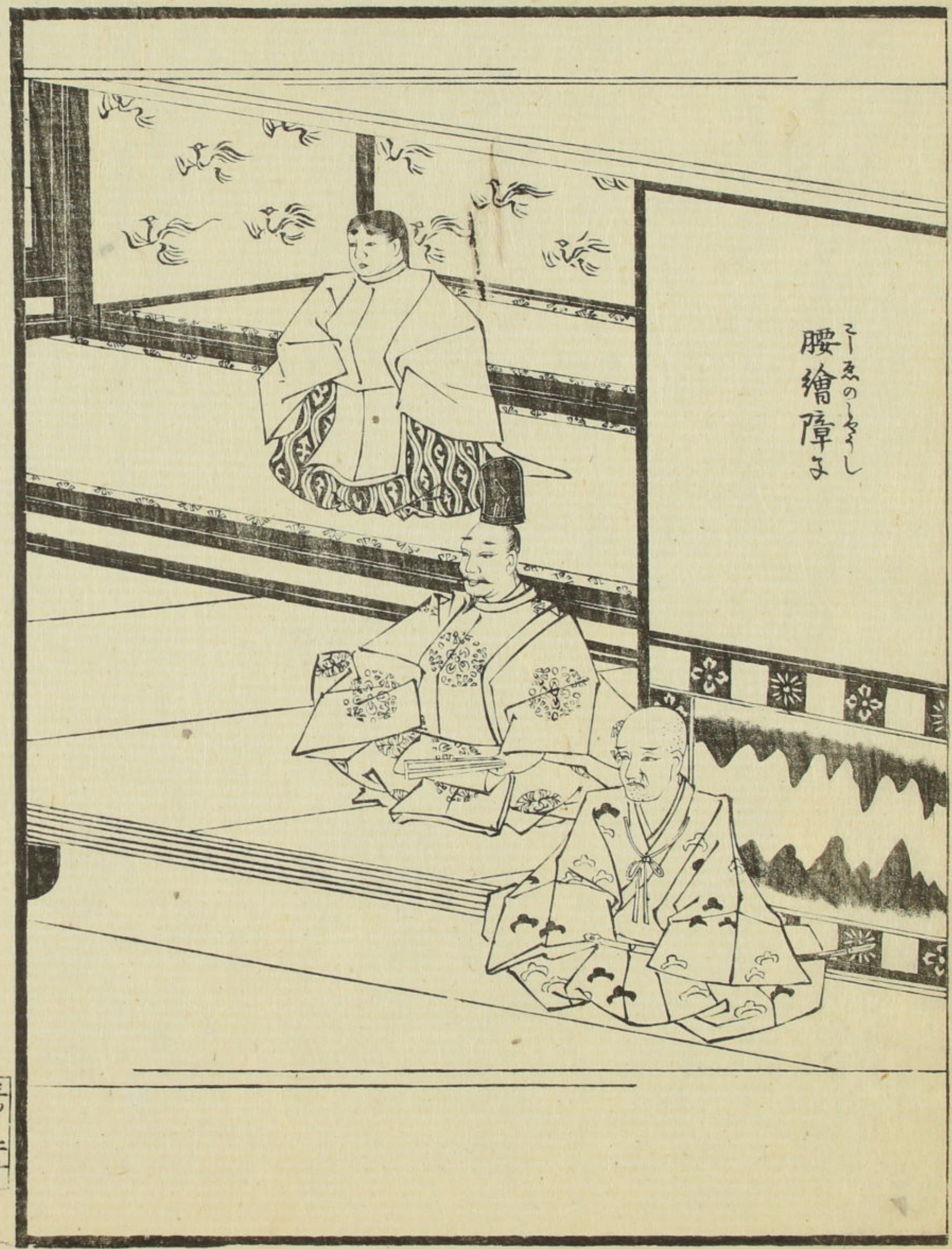
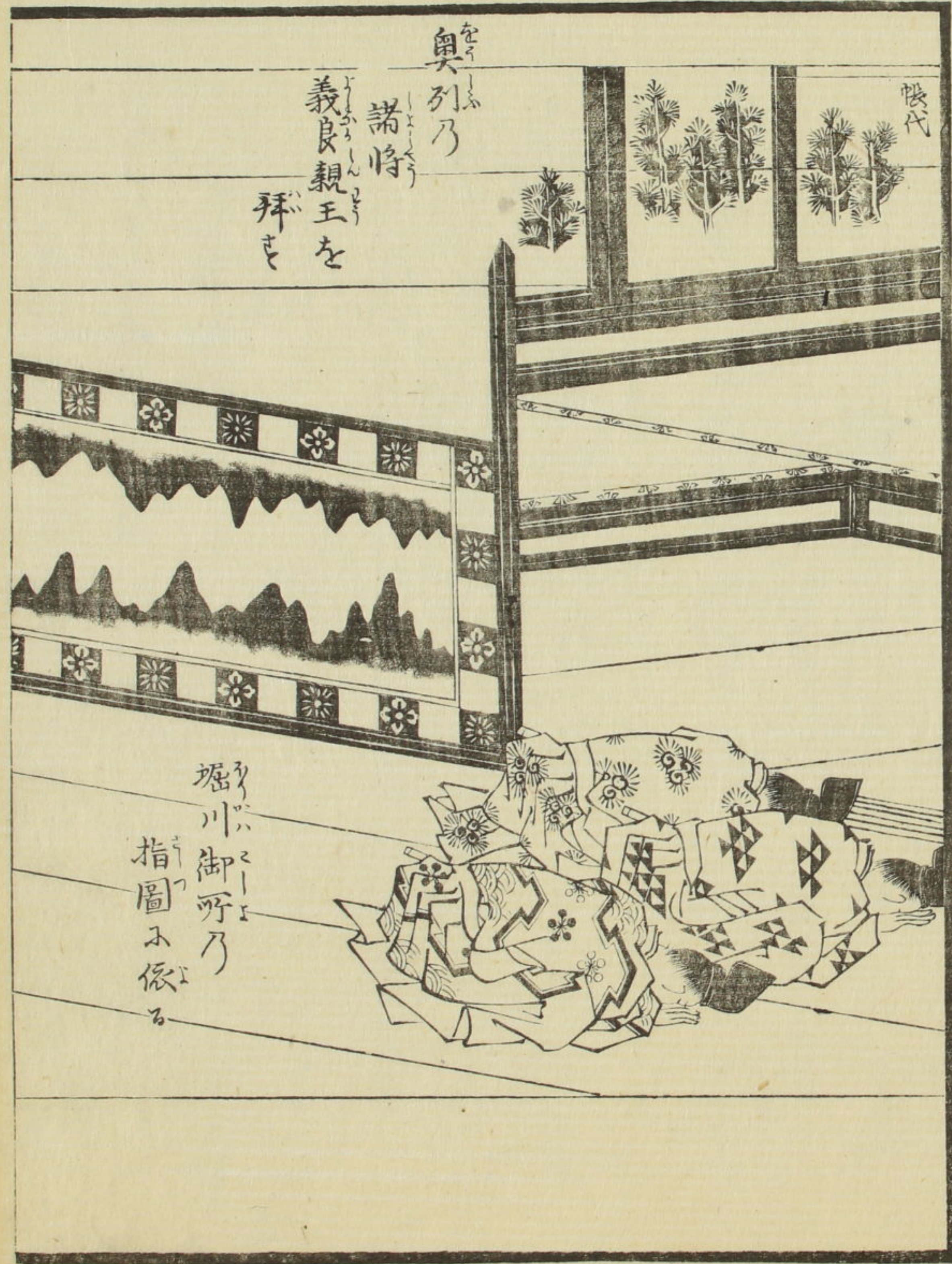
光^嚴院^重祚^也^{後醍醐天皇乃皇太子}小^おろ^しける^也

あ^りける^海々^同二年^{後醍醐天皇}隱岐^還幸^{あり}く^也

重祚^ノ議^ヲ用^ひる^海々^議ら^ひく^海々^重祚^とハ^了なる^也ありける^海々^ハ代

宮を以て東宮に立奉り覺け給ふ十二月廿一日後醍醐
天皇花園院を御出あつていせのふ南へ臨幸あり
つきは暦應元年八月十八日東宮成良を廢しまうと
恒良親王と一所に押給正なりしは猶も直義公安の
らとおひけしは興國元年12月粟飯原下徳吉氏光
を以て嬪毒をまうしはと終り毒あく荒御あつて
御年十五世より黄痘乃御病と披給きとや
義良親王の嘉暦二年誕生す御元弘元年の歳
みくす一御を同三年十月陸奥出羽乃國を統括
まらむんたあまを後陸奥吉顯家卿及び親房入道と
若く入部あつ時六歳あつ建武元年夏陸奥國子

まゝ親王ふあき勢ら致す本年十一月陸奥の國津經乃
凶徒時如高系等親王不降を陸奥出羽大の王化
る伏しけり不建武二年八月相摸入道乃余類一揆を企
たくけしは伊達約旗をさけつ約向ひ忽ち是を
討平らけ兩國平均を竟れを仰ぎ六郡の押領使押領
使あり下野押領使秀卿北陸道七ヶ國押領使為賴陸奥
押領使秀倫乃類なり陸奥を六郡一人乃押領使を
置りて一國九人ふ國中の倡行しまうける處へ
足利尊氏を一族なりけり陸奥守家長尾張守高經
を以て興利乃管領とす下りけしは國人まて二心
を懐くまはるなりと出来ぬと親房入道乃智謀と
顯家卿乃忠烈潔く結城入道乃義勇猛くしてよく



官軍を統領し終ひし家長を討亡して後當氏を誅を
ら多へさ中あく十二月廿三日陸奥國高野郡ふたつ合
戦し及ひし親王乃先鋒相馬胤平兄弟より軍しけし
ハ家長一戦し討負く方郡へ引退く親王あまを延
く同月廿六日乃合戦し打勝むし不と官軍いふ
競進く遂に家長を孫倉乃板本親音重よく誅せら
る然らば當氏を一戦し討亡せよとて當氏上流の跡を
追て攻上らせまきく乃軍ふ打勝くあく茲三年正月十三
日近江國了着を終ひく去十日了主と山門へ臨幸成
るきも莊嚴うり大内裏ハ兵火乃ため焼失ぬと
例しめしころハ佐々木氏頼
六角時信の嫡子
今年十一歳なり

觀音寺山の城 近江國武佐郡と高野郡との間あり
今了石壁礎石をたぐ一時せ免彼り直子東坂本へ
氣向ありく三井寺京都乃合戦しハ法小荒手あまは
強うり方へ乃々向し官軍志むく勝ふ乃里け
是は當氏打負九割へ落しけりかく親王を三月十
三日所元服ありく憲良と所衣を中志の後り親良と
改ら後き三品を叙し陸奥大守を任きり也く同月廿
四日奥郡へ下向す海一ぬ法多よ主と當氏乃為ま
花山院乃古所所へ押送ら也所なよ由陸奥國入等
傳承よりき多く報きまよりハは顯家郷と苦子靈山
乃撤り入く籌策を旋らされけりよ主と芳野山へ臨

幸ありぬと聞くと親王より後ひもか國人も多う
けまはそれらを引率ししより鎌倉をせむ願しとて
延元二年八月陸奥乃茲守府を打つる十二月鎌倉へ
打入る人々利根川薊山安原乃戰官軍より中利を
治しかばそ乃氣奮くく山を中後川へ降参乃軍兵ハ
朝夕子隨ひ付たりし不と子其勢もくく不敷く満ぬ
十二月廿二日小坪坂本前濱腰越乃戦中味方勝利と
ありしかば乃代官より是利親経鎌倉より居た
まけるる高上松の老と具足しし行方へり落しり
けん親王乃御勢子怖懼て首さし出以兵中よりしふ
より正月八日延元二年鎌倉をたつとら先陣とく

貞濃國入付ハ官軍次第不勢加らりく六十萬余兵無
井未坂陣をくはは國東より上松民於大捕憲顯排井
播磨直常河戸葛西三浦鎌倉或我七黨鬼玉楯楯猪
西丹黨下野國あくは清黨乃旗頭子芳賀兵衛入道禪
等なり可等八萬餘騎親王乃歩込を追く攻上教爰り美濃國
任人土波彈正女頼遠頼光九代孫土岐德成孫次郎
そ乃頃在國く居りしけり日前を通る敵を大勢
不怖くく箭の一以て中射りけぬと云法やあふ頼遠
子於く同日餘分大勢子馳向ひ命を際の一合戦し
勇士乃志を戰場乃苔の下九原乃尸より遺とへしとく
僅子其勢一子余勢少くたふ妻遣り原より打く出親王

乃六十万騎ヲ馳入顯家郷ヲ拮据乃旗を見ぬ
あまは各不負士彼頼遠不不餘一餘を兵共とく六
萬余騎と引合々青野原へ打勝と土岐の勢を見ぬ
に方十里不餘不廣野の中僅乃不勝少々控へた
を必定討死と必切たか未共よ悔く打漏とかと味方
と凍れ時乃聲を合せ平時より戦入と二百余騎を討
死し頼遠のく七百余騎みく春日少將顯時朝臣
也乃二萬余騎不馳うる顯時朝臣あまを又く頼遠を
討く親王乃所感うあはくはとく士卒を勸め自志先
了駈らしういは義を重し名を惜む勇士等これ前不
と叫喚く責我入不と頼遠尤乃眼の下衣乃口服して

鋒深く切付ら七百余騎乃勢も廿八騎ヲ打かさ
今々是ととく長森乃城へ引落る鬼神の如く各々
ありけか柵井直常も二十餘ヶ夜戦入と七十六騎
打かさ終馬の三途平頭二力さり也と亦多勢
この是云とつと引退くその外芳賀村可身顯家郷
乃手乃去伊を伝使乃一族と由云余騎と我ひり
彈可散く打負く御りみあり討死くけり上杉一家の
人々新田徳孝乃宇都宮乃紀清西黨と相戦ひる
上杉五是ゆかく打負く方志也以あまを青野原の
合戦と後乃世と由語と傳えけり王とく處く乃合戦
了打勝入と官軍乃義を鐵入り比し名を竹早と遺

さんおとを思ふに故に死力を致さし勲功ハ宣ふ也共
親王いさく初沖より海へ
義良親王 主上乃南山人
光を鞠く荆棘を踏を塞く也海を深く悼まを給
ハ御自身甲冑を被ふハ利兵を取ら也三軍の勇士
と共子霜雪より起臥を固くかき終凶徒誅戮を以て
御心とあき終り浄孝心を皇大神宮の憐れまを以て
應加彼乃神力ふあきかくて親王ハ南都を征く芳野
殿ハ入き終り同七月より奥列へ歩下向あき入りてハ
月十七日海國大津より出帆ありける九九月十一日伊豆
國三崎乃澳ふく浪荒く浪高く官軍乃船處へ漂波
きふ親王乃御船よりり風を逆ひて勢利篠島乃里へ

吹込さき終り吉野より五日野僧心頼意を沙使みく妹
芳野へ還所あふ船より由仰らきける時ふ頼意
神舟中御船より入り奥津浪をりけり伊勢の濱屋
実ハ太神宮乃所よりいあふ船よりや明る年乃三月
芳野殿へ還所ありて十八日皇太子ふたきさら也その日
讓位受禪の儀おこされ十六日後醍醐天皇山崩御あり
神十月五日芳野殿より即位あり御年十二 後村正院
乃勸車心
主上 後醍醐 隠岐の島へ遷幸ありて元弘二年二月二日
國分寺の御所ふ入き終りハは隠岐前司清高近國の
一族を催入りて守護しませる 明年二月廿四日より
括るるに乃官軍楠乃早乃城強くして戦ふことり

寄手毎夜敗北一塔宮乃能士卒を蒙り謀略を施し後
 入りより京鎌倉を追討して隠岐島へ御遊り来り入り
 かと風聞せしやは清高宮門を嚴重に敬衛し事りけり
 元弘三年二月下旬富士各判官義綱を番あて中門乃警
 固ふ立けるあて終に表を奪取す謀叛を興さずやと
 おり入らる付て執事内侍系より官女を以て御遊を下
 さ終より義綱より便ありと告りて出雲御老の方へ臨幸
 らせらる入りし中を奏聞せしは於義綱志乃後を御遊を
 らる入りた名りか乃官女を義綱より下させけしは義綱
 忠烈乃志を顯ししは乃お雲國へ立越國へ入りしは乃
 をりらひ御遊り来り入りし中を以てお雲國へ立かへ
 中門の御

番と云ひ中門も有りと知る御門乃警固とあはれ官門も有
 と願ひ官女を以て御遊を下させしは乃官女を義綱より給
 け外も塩原高貞を下させしは乃西臺あり女三日乃扱
 隠岐乃御所乃焚燬を考ふる了たきり
 至く三位教の御遊乃期近付たは他所より移り御遊
 あく御遊りめさせしは乃御香國へ遷幸ありは是は
 近國乃官軍雲霞乃如く集り隠岐判官清高一戦了打負
 けりと聞て隠岐國人急り心替りしは乃けしは乃三位教も
 以んゆりしは乃船より移り入るは乃都へ歸り入らる後
 遠島乃憂りし御住居羨里乃因て不孝の事し昔語を
 再會の花乃春乃慰免し樂を共さかき教へきとて大佛
 貞直り所領を賜りて其教飾乃料子充りて建武二年
 二月准三宮乃宣旨を下させけり是より准后の御遊御

皇^{ミコ}后^{ノミコ}中^{ノミコ}宮^{ノミコ}不^レ超^ル過^ス一^ニ師^シ範^ハ儀^ノ形^ノ乃^シ大^ニ臣^ト 職負令了太政大臣ハ一人の
師^シ範^ハ儀^ノ形^ノ乃^シ大^ニ臣^ト 職負令了太政大臣ハ一人の
儀^ノ形^ノ乃^シ大^ニ臣^ト 職負令了太政大臣ハ一人の
卿^ノ相^トと云^ハと朝^シ了^レ壁^ヲを贈^ル之^ヲ然^ル食^ヲを獻^ル呈^シて其^ノ顧^ト眄^ヲを
喜^ビひ^ハ誰^カ起^リ不^ルと云^ハと子^ノ賂^ヲ貨^ヲさかん^ル了^レ約^スと云^ハ是^レ
為^ルと云^ハとハ不^レ敷^クと云^ハと内^ノ奏^ヲ乃^シ踏^リひ^ラけて汗^ヲ馬^ヲ乃^シ勞^ス
苦^シ汝^ヲ不^レ然^ル竹^ノ管^ヲ弦^ヲ乃^シ頑^ニ童^ト了^レ妨^ル也^{ナリ}報^ル國^ノの忠^ヲと云^ハ汝^ヲ
了^レ解^ル語^ヲ傾^キ城^ヲ乃^シ伎^ヲ女^ノ不^レ奪^ル汝^ヲけ^ルを以^テ義^士之^ノ冠^ヲを掛^ケ
て伯^ト夷^トの清^ヲを慕^ヒ勇士^トは怒^リを押^スと云^ハ淮^ノ陰^ノ乃^シ志^ヲを銜^ム
ま^ニ愈^スと云^ハ汝^ヲ准^ル后^乃口^ノ入^トと云^ハ不^レ敷^クと云^ハと天^ノ下^ノ皆^ク
准^ル后^乃周^ノ旋^ヲ了^レ歸^リけ^ル不^レ去^ル於^テ憂^ヲた^レ中^ニ了^レ兵^部卿^親
王^大塔^の啓^乃 乃と云^ハと皇^ノ太子^了た^レと云^ハと汝^ヲ入^ル也^{ナリ}を

相^シ摸^ル入^ル道^ノの支^ヲ不^レ了^レ依^ル一^ニ衆^ヲ止^シ觀^ス乃^シ真^ニ諦^ヲをハ學^ム
せ^リ汝^ヲ今^ニ還^ル俗^ニ乃^シ汝^ヲと云^ハ征^ル夷^ノ大^ニ將^軍不^レ補^ルと云^ハ汝^ヲ
中^ニ興^ル乃^シ大^ニ勲^ヲ也^{ナリ}汝^ヲ海^ノ也^{ナリ}知^ル處^ノ也^{ナリ}汝^ヲ幕^ノ府^ノ
外^ニ衛^ヲを解^ク儲^ノ闈^乃内^ノ宮^不備^ムと云^ハ汝^ヲ了^レ誰^ノ傾^キ
中^ニへ^レ形^也汝^ヲ准^ル后^乃不^レ安^ク守^リ也^{ナリ}汝^ヲ處^ノへ^レ
氏^直義^也汝^ヲ親^王乃^シ汝^ヲを諺^云と云^ハ汝^ヲ女^ノ儀^ノ也^{ナリ}
あ^ニと云^ハと親^王乃^シ汝^ヲ謀^ル報^乃と云^ハ汝^ヲ了^レ汝^ヲ
主^上乃^シ汝^ヲ不^レ汝^ヲ親^王之^ノ皇^ノ太子^と不^レ汝^ヲ
發^ル軫^ノの慮^不た^ク親^王乃^シ勲^功不^レ報^ル也^{ナリ}汝^ヲ了^レ汝^ヲ
之^ヲ志^ス也^{ナリ}汝^ヲ汝^ヲ必^ズ定^ム也^{ナリ}汝^ヲ思^ハ也^{ナリ}汝^ヲ傳^ス
之^ヲ唐^乃高^祖之^ノ大^ニ勲^功乃^シ三^ノ男^秦王^世也^{ナリ}汝^ヲ二人^乃見^ル

を棄てて共ニ百年乃洪基を削りて建武乃今を幼雅
乃鐘愛乃たけ子 関内乃長子を疎くして百王無疆乃平
安城を出て一日子本乃芳野山乃櫻乃雲を分りて之を
五十餘年乃春秋乃いくく乃忠臣孝子命を塵芥より
も軽くも各を鑑石よりも重くとかへ夫も別れし妻父
も指らぬし孤朝夕のたのきを失へば源もも推為
も志々か也汝也也是も中興乃聖断牝雞乃晨ふより
小弁乃詩の起也ふ所以と知能き形りさくも各部郷親
王をば黜移入と云とも尊氏直義乃女計を亂し致也
かかく王上二夜山門乃臨幸ありて東宮北陸乃雪より
あふく却て西宮を無慙乃鳩毒不殺まふしと云ふも出る

者尔よか魚るとや中屋を至と南へり巡狩ありて永く還
幸乃儀ありりかとお准后ゆおあしと後ハ多ありて登
遐の後義良親王即位しゆはは皇太后入あつて
後ハ正平六年十二月廿八日尊号乃決定あつて新待賢門
院とすき同十二年四月廿八日芳野教みり崩御なり
年五十七と云 乾元元年壬寅の生たは也 愿岐島へ 沙墓
ハ如意輪寺あり
藤原皇后庶子傳贊乃曹大家云 婦徳才明ふ絶異たる
を必とせし婦云 便に利辭を必とせし 婦容顔色美貌
を必とせし 婦功工巧人外過るを必とせし 婦氣色
代旧者を兼て大家乃福を祈り及ん 徳ハ明らやし
さく世にも言ハ

小容ハ羨願了功も宜かるゆゑ寵をたたく一房を専
 人子勝きたまふ
 小々々主上乃聰明を蔽人ことをはたす一足利高氏
 乃ため子護良親王と離間一建武中興乃政を蠱害を
 去て何如と為んか然也と云元良を誣育一高氏
 國母とあり偏安乃業の宮の盛を備え候といへ
 也甘毳乃奉張四海乃義を以て幸かるゆゑ
 親を養ふ人を史記の聶政傳小胆甘毳を以て云里
 然也と云隱島乃隨逐ハ尋常女子乃及人盈を始るあ
 りと云丈夫と称せんゆ溢美とせ以護良親王を問せ
 去月敬相伯仲后二十一歳の時き上り主上時小四
 自ら親王を疎くおさす一故ふる一

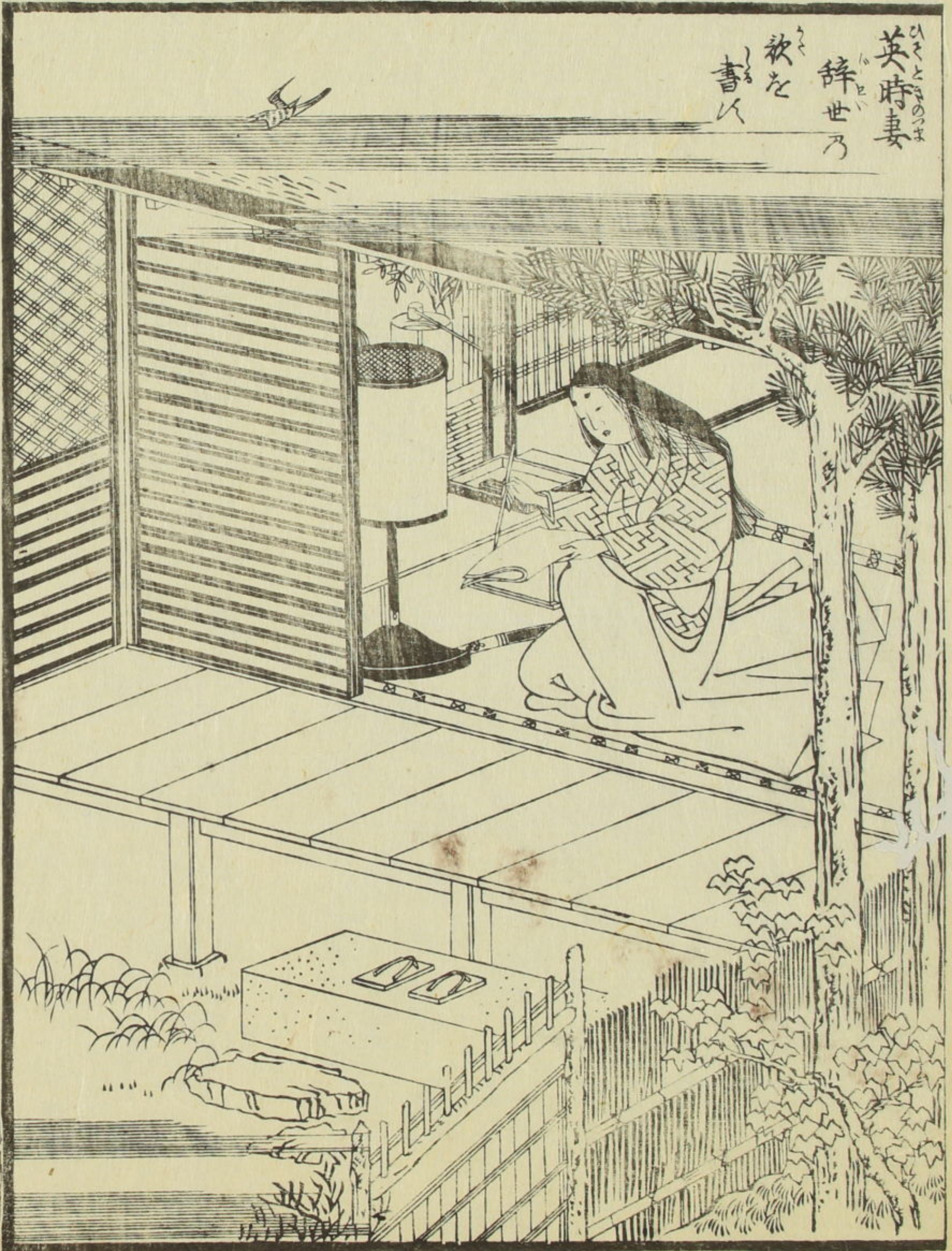
筑紫探題北条英時妻赤橋氏影像





筑紫探題北條英時乃妻ハ赤橋相模守盛時
 陸奥守重時乃二男武藏守長時乃孫ハ鶴岡
 赤橋乃傍ノ家ありハ赤橋ト稱シ
 乃女ハ一々
 等持院贈大良尊氏家ノ室家乃妹ハ英時九列乃探
 題ト下向キハ妻ト從ク筑紫ト赴キける元
 弘三年肥後國菊池次郎寂阿入通官軍ハ屬シ英時ハ博
 多乃館ハ寄來ト合戦一寂阿戰敗セテ討死シけるト云
 ト九列乃地頭甲乙人ハ其郷村乃地主等ノ内
 任セラズハ甲乙人ハ戰ハ乃軍團兵士乃先
 鋒ハ甲乙を合戦ト軍防令了見エたり
 兵ハ加ヘテ二度博多ノ館ハ押寄テ合戦一英時ハ軍
 兵を倒シ一寄シハ謀シ合テ英時を射けるト云
 五月英時妻子を關東へ還シテ身ヲ浴ビ軍ト廿

英時妻
辞せ乃
秋を
書以



五日と云ふ自害し失ぬるより聞え夕也は妻の
 小たえんおあしく母の伏す死んとせしを冊く人々
 ころ先らもて後然る日を過しけふ了閑東の六波羅
 滅ひ父乃盛時自害せしと聞きまり人乃ひま求め
 淵川子身をあけんと泣哀にぬるを是利尊氏郷乃北方
 義隆將軍乃母云登真院贈一品大夫人懇しやめ給ふ
 定海大禪定尼貞治元年五月四日逝去
 申あくる尊氏服乃亭不中懐又くをり也けふよふ
 たりとけけ形世を恨む

あらしきりし心泣く乃古へを免乃おひいと見ふ
 となと打あらしめ建武元年五月廿二日修理亮英時の一
 周忌乃仙善かしくおかく營々くおおひいと見ふ自害し

て失ふけちを夜咽く人々あまを見し教馬をいさすけと
かひかゝ終る夜坐ふ乃其業をく烟とかゝ卒都婆を造三
あうの連とも大正乃末乃亂るあう卒於波安倒也墓
壞らむく令ハそれ地も定るあう以とかや等持院舊
或云鎌倉より往く東勝寺乃舊跡を觀る北條九代の
繁昌た、一瞬乃烟と立昇王一族門葉八百餘人共
死を以地も潔く尸も秋霜と消失也とも各ハ萬年
乃後乃招以死る其乃人の妻妾いり成れりけん
それ影嚮を知ら固かゝ赤橋氏獨自刃くく夫を黄泉
の中子慕ふ然もそれ筑紫を去ときも死せり夫
乃命辭とへりくやる處あまゝかおゆる父盛時守氏卿

乃縁者た也とく衆先く自盡一義を萬卒不勸
む果く尊氏卿北方の縁より赤橋氏と我亭子入
くそ生を全くせり或以時北条乃氏族一人乃存る
もの形一ま色り其生を貪るを笑ふものあらんや唯
りそ死を遁重くを恨るものありんや其志氣徐々
く一周乃歲月を過し訪ふ人乃絶たふ親夫乃追
薦を修し心浄く終り七星乃鋒も早く以遼乃耶律朮
者妻蕭氏名を訛り死く妻不居哀毀を極め既も
葬ら後蕭氏乃云夫婦乃通い陰陽表裏乃如陽かくい
陰いはく子たらん表かく裏いはく子附ん妻今不幸
あく所天を失へり更り何を怖んと云白刃く卒

と云里赤橋氏乃一周乃追福をあしく後舒み自害を
志と蕭氏り葬埋乃事終るく理を明らうふ後く自刃
せし共く一轍了出たふらぬ

先進繡像玉石雜誌卷第三終

